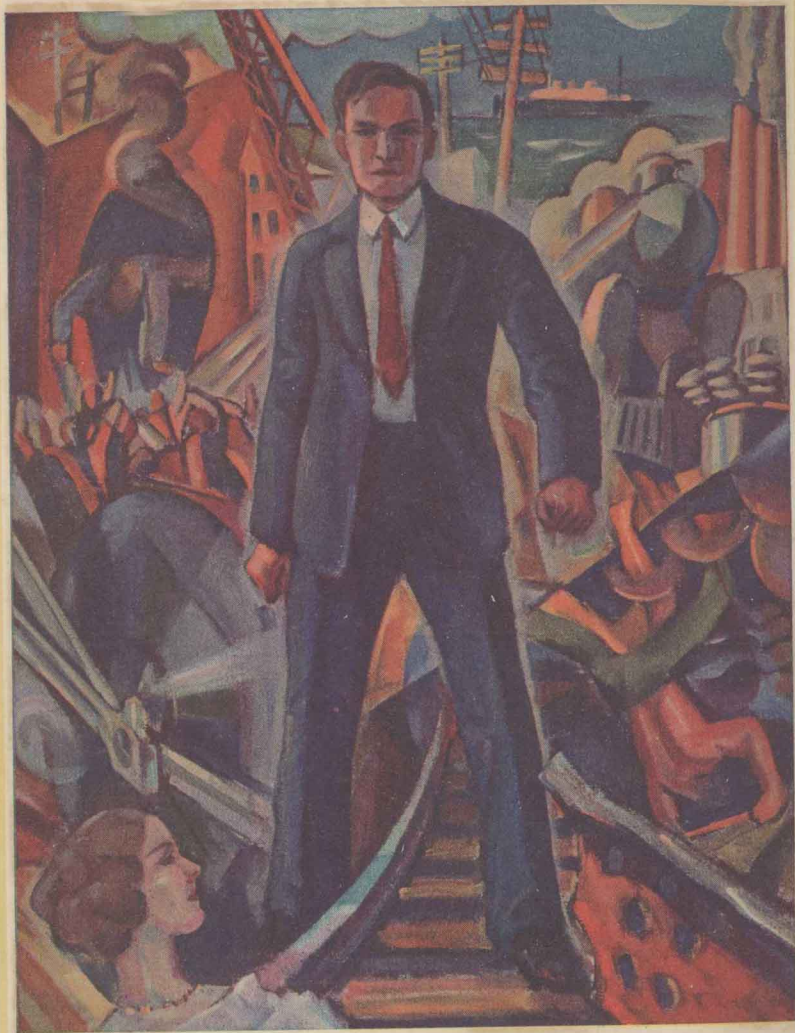




TUNNEL

VON
Kellermann

著 シ マ ア ラ ッ ケ

ル ネ ン ト

篇 ニ 外

譯 吉 豊 秦

版 出 社 潮 新

非賣品

第二期

世界文學全集(12)

トシネル

外二篇

第六回配本

昭和五年十月廿五日印刷
昭和五年十一月一日發行

翻譯者 秦 豐 吉

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

解 說

作者ベルンハルト・ケッラアマンは千八百七十九年(明治十二年)三月四日、獨逸フュルトに生れた。父は小官吏。學歷はミュンヘン工科大學に通つた事があるだけである。外國旅行に費したる日多く、伊太利、佛蘭西、英國、米國、日本、波斯、印度等足跡普く、歐洲戰爭中は從軍記者として西部戰場に活躍し、獨逸文藝院會員に推擧された。現住所はエルデル・アン・デル・ハアフェル。

ケッラアマンの作品は、「エステルとリイ」(熱望の小説、千九百四年)、「インゲボルグ」(長篇、千九百六年)、「痴人」(長篇、千九百九年)、「海」(長篇、千九百十年)、「日本の散歩」(旅行印象記、千九百十年)、「さつき・よ・やつさ」(日本の手踊研究、千九百十一年)、「トンネル」(長篇、千九百十三年)、「西部戦線」(從軍記、千九百十五年)、「アルゴンネルワルドの戦」(皇太子キルヘルム序、千九百十六年)、「十一月九日」(長篇、千九百二十年)、「聖なる人々」(中篇、千九百二十二年)、「シユエデンクレエの經驗」(中篇、千九百二十九年)、「シエレンベルグ兄弟」(長篇、千九百二十五年)、「ミュンステルの再洗禮者」(五幕物戯曲、千九百二十五年、初演千九百二十五年十月十六日、デッサウ、フリードリヒ座)、「波斯の隊商の道にて」(旅行記、千九百二十八年)、「神々の道、印度、小西藏、シャム」(旅行記、千九百二十九年)等がある。

なぜこの三篇を選んだか

長篇「トンネル」は作者ケッラアマンの最も代表的の作品である。その著作時期は大戦前であつて、今日から見れば多少舊作とも思はれるが、大戦後の小説に於て、「トンネル」を凌駕するだけの力作はない。しかもケッラアマンの全作品を通じて「トンネル」程最も尖端的にこの作者を現すものがない。「トンネル」は今日に於ても、獨逸で最も愛讀されてゐる長篇大衆小説の一つである。その版數を重ねた點については、戦前の「トンネル」戦後の「西部戦線異狀なし」と並稱される位である。ケッラアマンの作品には、短篇又は比較的短い中篇がないので「トンネル」に配するに、他の小説を持つてくる事は甚だ困難であつた。そこで、本書一冊の一定した分量上、且つ「トンネル」が純歐米的の題材であるに對して、この異國的な作者の見たる日本を紹介することにした。但し「日本の散歩」の一篇から、譯者は最も興味ある都市のみを拔萃して冗長を避けた爲に、これは「日本印象記」といふ名で紹介する事にした。

ケッラアマンは大衆作家なり——譯者は、この「トンネル」の讀者に對して、ケッラアマンは大衆作家であつて、この全集に收められた多くの他の藝術主義作家とは異なるものであり、従つて「トンネル」もまた大衆小説であることを念頭に置かれることを切に願ひしたい。大衆小説と藝術小説とは、その價值にどんな上下があるか。これは又別の問題である。

二十世紀の初めに柏林第一流の出版商のフィッシャヤ書房では、多くの有望と認められた新進作家の作品叢書を發行した。その中に數へられた顔觸には、ヘルマン・ステエル、トオマス・マン、エミール・シュトラウス、ヤアコップ・シヤッ

フナア、ヘルマン・ヘッセ、フリイドリヒ・フッフ、エザアルド・フォン・カイザアリンク、ヤアコップ・ワッサアマン等があつた。かういふ作家が華々しく打つて出た獨逸文壇で、しかも右のやうな人達が純藝術主義派であつた間に、幾分でも大衆性を帯びた作家にワッサアマンがあり、更に以上に大衆作家であるのがベルンハルト・ケッラアマンであつた。

ケッラアマンを之等の作家達に比べて、最も優れた點は、極めて熟練した技巧と、讀者心理の巧妙なる把握と、作品の效果に關する驚くべき知識である。こゝに於てケッラアマンを批評して、名人と呼ぶ人が多い。同時にケッラアマンの缺點とされる處は、その作品の内容性である。ケッラアマンの才筆は他の多くの作家を凌駕してゐる。けれどもこの作家は餘りに才筆を濫費して、甚だ表面的に走つた批難も少くない。例へばカイザアリンクの精神的な基調、ステエルの内面的苦悶は、ケッラアマンの作には多く見られる處ではない。大衆作家としてのワッサアマンに比べても、なほ皮相的のそしりを受けるであらう。けれどもケッラアマンは、かういふ純獨逸作家に比べれば、その取材の範圍に於て、その構想の大きさに於て、その描寫の明快さに於て、その色彩の國際的なるに於て、すべて他の作家に見られない異色を示したものである。特にケッラアマンはもつと重大な意味に於て他の作家と異つてゐる。それは常に藝術に對して甚だ窮屈過ぎる獨逸小説壇に於て、甚だ大規模な且つ大膽な通俗小説家、大衆小説家として名乗り出た事である。ケッラアマンは偉大なる藝術主義者ではないかもしれないが、好愛すべき大衆作家である。他の作家がすべて象牙の塔に籠り勝なるに反して、ケッラアマンは易々として街頭大衆の中に投じたのである。獨逸文壇では、この頃でこそ大衆作家は珍しくない。けれども今から二十五六年前に於て、この舉を敢てしたケッラアマンの非獨逸性は、決して看過すべきものではない。

ケッラアマンの作品には、北奥の作家クヌウト・ハムズンの影響が多いと見られてゐる。ハムズンの小説「飢ゑ」の激

越な感情の自然性が甘くされて、ケッラアマンの小説「インゲボルグ」の洗練された美しい感情生活となつたと説く人もある。初期の作品「エステルとリイ」や「インゲボルグ」は、今日の大戦後の青春男女諸君の興味を牽くものではなからう。けれども、その華々しい甘美な戀愛小説は、また大戦前の「エルテル」と見ても好いが、この初期の時代に於てすら、この作家の豊富な才能の浪費を以て、ケッラアマンの弱點として惜まれたものである。

「エステルとリイ」や「インゲボルグ」には、叙事詩的筋書に乏しく、一種の戀愛讃歌に出来上つてゐるに反して、第三の小説「痴人」は、甘美な光に色どられた抒情詩的感情の渦巻が、はじめて叙事的な筋によつて整頓されるに至り、「痴人」に於てこの作家の人間の並に藝術家的發展が評價されたと言つてよい。この小説はハムズンの小説「神祕」ともよく比較されるもので、その人物もハムズン型だと言はれてゐる。この小説に於てもケッラアマンの抒情詩的情緒は、最後に至るに従つて濃くなつて來て、「インゲボルグ」に現れたケッラアマンの詩人としての姿が、再び顔を出してゐる。ハムズン型も、この小説を以て最後としてゐる。

「痴人」の次の「海」では、この小説家の旅行家としての姿が次第に現れて來てゐる。この作品は、小さなブルタニユの漁村を題材とし、主人公は遠い世界の端へ出掛けようとして、前の作品に見られる戀愛小説的古さは悉く捨てられ、國際的作家としてのケッラアマンの面影が、漸く顯著となつて來てゐる。極めて潑刺とした印象主義的色彩に富んだ作品だ。「海」には思想、苦惱は認められないで、外面的な體驗と束縛されない衝動的享樂を列べたものとするのが、この作に對する非難である。

その次の小説が「トンネル」である。「トンネル」は、ケッラアマンの作品の中で、最も好評を得たものであり、獨逸で最も多くの讀者を獲た作品の一つである。その構想に至つては、ケッラアマンの從來の作を初め、この時代の作家に

到底見られない野心的なものであり、来るべき機械時代に於ける人間の偉力と金力を縦横に描寫して、その空想的なる點に於て、しかも今から十數年前に於て、今日の科學觀から見て少しも荒唐でない觀察をしてゐる點を見れば、ケッアマンの叙事的才能が、決して單なる達筆に終始してゐるものでない事を知るのである。大西洋の海底にトンネルを貫通して、之に依つて歐米間の交通を目論む事は、ツエッペリン飛行以前に於ける歐米技術家の一大野心であつたかも知れない。然しこれを小説化さうとした大膽と、その具體的事實の適確さに於て、ケッアマンの空想は誠に驚嘆すべきものである。これ丈の構想を敢てただけでも、この作家は明かに純獨逸的な狭小な眼界に動いてゐる他の小説家とは比べられない、動的な國際性を持つてゐる。今日の獨逸で、これ程の構想の作品を探すならば、テア・フォン・ハルボウの「メトロポリス」でも持つて來なければなるまい。「メトロポリス」の非現實性に比べて、「トンネル」の現實性がどれ程科學的に組立てられてゐるか、これは讀者の容易に知られる處である。一つの科學小説としても、冒險小説としても、獨逸には他に見られないケッアマンの最大傑作として、今日に至つても尙讀者を絶たない所以である。

歐洲大戰の間ケッアマンは「柏林毎日新聞」から派遣されて、西部戰線に従軍記者として活躍して、優れた戰線記が「西部戰線」といふ本になつて出てゐる。大戰後の獨逸の混沌たる經濟生活中に苦んでゐる二つの型として、飽く事なき金と享樂の搾取者と、自己犠牲的な人道主義者を描いてゐるのが、「シェレンベルグ兄弟」である。この小説は映画化されたが、コンラッド・フアイトが一人で性格の異なる兄と弟とに扮した。唯この小説の範圍は、戰後の獨逸の特殊な生活の爲に、外國の讀者には感銘が乏しい。この小説と並んで世に現れたものは、獨逸革命を題材とした「十一月九日」である。この二篇の小説は、いづれも計畫的に筋を追うて一直線に進んで行つて、讀者の頭にはごく入り易い。それだけに精神的理想的なものに乏しいかも知れない。けれどもその時代の問題と情緒を捉へ、今日の讀物を

提供する大衆作家としてのケッラアマンの機敏と才能には、誰しも驚かないものはない。

ケッラアマンの全作品を通して見て、これを燦爛たる火花に比べた批評家がある。それは眩惑的な曲線となり、濃となつて、讀者の心の空に打上げられる。讀者はその瞬間を樂むけれども、次の瞬間はまた闇の空を見るとの意である。ケッラアマンは偉大なる不世出の藝術家ではない。けれども今日の讀者に必要な、一般大衆の需めんとするものを提供する作家である。大衆は常に巨大な彫像のみを鑑賞するものではない。一瞬にして消える火花をも娛むものである。ケッラアマンの作が見上げるばかりの巨人像でないと云つて非難するのは當らない。燦爛として空に耀く火花は、誰の目にも入り、誰の位置からも眺められ、誰の耳にも快く聞える音を響かせ、誰も共に見て、これを娛み嘆賞し得るものである。飽くまで大衆を喜ばせる作家である。獨逸には甚だ數の少い大衆作家として、ケッラアマンの右に出づるものは、先づ無いと考へてよい。

日本に來たケッラアマン——ケッラアマンを日本の讀者に結び付けるものは、この作家の書いた二篇の日本印象記録である。しかもこの二篇は、他の多くの外國人の日本旅行記に比べて、全くその種類を異にした記録である。

ケッラアマンは戰前千九百九九年に西比利亞鐵道で日本へ遊びに來て、東京、横濱、京都、宮島、大阪等お定りの見物旅行をやつてゐる。こゝまでは決して珍しい旅行家でもない。けれどもこの日本旅行の間で、結局どこが氣に入つたかといふと、稿の財布も空になるときへ言はれた丹後の宮津である。この小さな海邊の町の藝者が大に氣に入つて、旗亭荒木屋で大盡遊びをやつたものである。今から二十年前の宮津の事であるから、定めて西洋人は珍らしかつた事であらう。けれどもケッラアマンには、狡猾な東京大阪の女よりも、無邪氣で親切な田舎藝者の方が、異郷を放浪する

旅客には、大いに安心と親しみを感じさせたものであらう。その證據には「日本印象記」にも「さつき・よ・やつさ」に於ても、獨逸人特有な惡意の觀察は少しも認められない。殊に「さつき・よ・やつさ」は、この田舎藝者を相手にした日本手踊りの研究書である。しまひには、この大きな獨逸人も、メリンスの振袖の半玉と一緒になつて、さつき・よ・やつさと踊り廻つてゐる。これ程日本の讀者に親密を感じさせ、しかも外國人の皮肉と自負を見せてゐない、愉快な旅行記は未だ嘗てない。この愉快な、氣取らない獨逸人は、獨逸人の性格としても甚だ稀に見る國際性を持つてゐる。英米人には絶対に見られない愉快な獨逸人である。尤も丹後の宮津で現を抜かしてゐたケラアマンは、年僅かに三十歳の遊び盛りで、すでに「インゲボルグ」、「痴人」、「海」を書いた後の新進作家として、勢の好い時代であつた。「トンネル」はこの日本旅行を終つて歸國した後の第一作である。「トンネル」の中には一人の天才人技師も出てくるが、その忠實なる仕事振を褒めた一節も、ケラアマンの日本の好印象の一端だと考へてよい。

長篇「トンネル」は、大西洋の海底をぶち抜く世界的大難工事である。讀者も定めて疲勞なさに相違ない。そこでその間には一息つく積りで、吉原でも、奈良でも、花魁道中でも、日本印象記について見物下すつて、或は丹後の田舎藝者でよろしければ、「さつき・よ・やつさ」と踊らして御覽になるのも、亦一興かと思はれる。(秦 豊吉)

目次

トンネル……………一

さつさよ・やつさ……………三四

日本印象記……………三六二

カゲーの緒——「トンネル」の士人公マツタ・アラン。

トンネル

ベルンハルト・ケッラアマン作
秦 豊 吉 譯

第一編

一

この季節第一の呼物は、何と云つても、マヂソン・スクエア會堂の新築落成披露音樂會であつた。これは古今を通じて超特級の音樂會の一つであつて、オオケストラの樂士の數が二百二十名、その中のどの樂器も、夫々世界的名聲のある音樂家が之を受持つて、指揮者として拔擢されたのは、現代で最も尊敬されてゐる獨逸の作曲家某氏で、僅か一夕の出演に、六千弗といふ未曾有の謝禮を貰つたのである。入場料には、流石の紐育つ兒も、度膽を抜かれたものである。三十弗以下ではとてもこの場所も手に入らない。そこへ抜目のない切符仲買の連中が、到頭、棧敷券一枚を二百弗からそれ以上に迄せり上げてしまつた。荷も音樂愛好

者を以て任ずる程の者は逸してならぬ大演奏會であつた。もう夕方の八時頃には、二十六丁目、二十七丁目、二十八丁目、マヂソン通りは、爆鳴を發しながら待ちきれずに身を震はしてゐる無數の自動車で、すつかり封鎖されてしまつた。切符を取次いで賣る連中は、轟々と詰め寄せる自動車のタイヤの間に命を任せて飛び込んで、十二度の寒さと云ふのに大汗を掻いて、弗の紙幣束を手に、氣違ひのやうに走つて来る自動車の無限の激流めがけて、眞向から無茶苦茶に飛び込んで行く。さうしては車の昇降臺と云はず運轉手席と云はず、屋根の上へまで跳びついて、その腹がれ聲で吼え立て、モオタアの急射撃を、更に幾倍にもさせようとするのである。

「いりませんか。御用はありませんか。平土間が二枚、列は十番目。棧敷席が一枚。平土間が二枚……」

斜かひに吹きおろす霰は、機關銃の彈丸のやうに往來の上へ叩きつける。

どれかの自動車窓がちやんと鳴つて、「此方へくれ」と云ふ聲がすると、忽ち賣子達は目にも止まらず潜水夫のやうに、復た車の間へ躍り込む。けれどもその賣買が済んで、金をポケットに押込んでゐる間に、この連中の額の汗の滴は、もう凍りついてしまふのである。

音楽會は八時に初まる筈であつたが、八時を過ぎる事十五分になつても、まだ見渡しきれない自動車の列が、隙さへあつたら、夜霧と燈光の中に毒々しく赤く輝やいてゐる會堂の玄關口へ乗りつけようと待ち構へてゐる。切符賣の連中の喚聲、モオタアの爆鳴、玄關屋根へ叩きつける霰の音の中で、矢つぎ早やに入れ替つて来る自動車が、後から後からと新しい人間の束を吐き出してゐる。物見高い群集は、黒い垣を作つて取り巻いて、来る車、来る人を大いに緊張して待ち構へてゐる。贅澤な毛皮の外套、鬚容、光る寶石、絹の光澤に包まれた腿、惚々するやうな白い靴の足、笑ひ聲と小さい叫び聲……

紅鱗の赤さと金色に飾られて、壯麗を極めて、のぼせ上る程蒸し暑い大廣間は、ボストン、フイデルフィヤ、バッファロー、シカゴの第五丁目のあらゆる富を蒐め、演奏の冒頭から最後まで、幾千の聴衆の忙しくひるがへす扇で震へ

るかと思はれる位である。女の見物の白い肩や胸のあたりからは、むせ返るやうな香水の雲霧が立ち昇つてゐる。時時この匂ひに交つて、突然に鼻を掠める變に臭い匂ひは、この新築の廣間に使用された漆と石膏とペンキの平凡な臭氣だ。天井の格子からも圓天井からも、無數の電燈が方々に群を成して、燦爛と輝いてゐる。餘程頑強な健康な人でもなければ、この燃えるやうな光線には耐へられない程きらきら光つてゐる。粹な巴里の衣裳屋はこの冬の流行に、つばの無いヴェネチア風の帽子をはやらせた。淑女諸君は、これを髪の上へ、少し後へずらして召しておいでだ。衣裳といへば、レースや、金糸銀糸織り交ぜて、それに纓、モオル、眞珠、ダイヤモンド、高價な材料の飾り物をつけてゐる。しかもさういふ連中が絶え間なしに扇を震はして、絶えず頭を軽く動かしてゐるので、このぎつしり詰つた平土間の上は一面に燦爛として、ダイヤモンドの火花が、幾百幾千と到る處から輝いてゐる。

この音楽會場と同じやうに豪華と新奇を見せてゐる聴衆の上を、疾の音に流行遅れとなつた巨匠連の音楽が吹き抜けて行くのである……

技師マック・アランとその若い細君のモオドとは、オオケ

ストラの直ぐ眞上の小さな棧敷に入つてゐた。アランの友達で、この新マヂソン・スクエア大宮殿の建築者であるホッピイの計らひで、この棧敷の席に金を出さずに入れて貰つたのである。けれども、アランがわざ／＼自分の製鋼所のあるバッファロオから此處までやつて來た目的は、音楽を聴かうといふのでは無い。アランには音楽の理解は少しもなかつた。その目的は、鐵道王で大銀行家であるロイドと、十分間はかり話をする事で、それはアランには、何よりも大事な相談であつた。ロイドといふのは、アメリカ合衆國最大の有力者で、又世界で屈指の富豪の一人であつた。

この日の午後、汽車で來る途中から、アランは或る軽い昂奮を抑へきれなかつた。つい今數分間前までも、同じやうな特別な不安に襲はれてゐたのである。それは丁度向側の棧敷がロイドの棧敷で、そこに誰も來てゐないのを一目見て確かめたからであつたが、今はもう、すっかり平靜に復つて、もう一度この事柄を見直す事が出來た。

ロイドは彼處に來て居ない。恐らくいつまで經つても來ないのだらう。又ロイドがやつて來たところで、まだ何事も決りません——ホッピイが寄越した電報には、もう半ば成功したと云はんばかりの文句があつたが。

アランは腰かけてゐる、或る物を期待し、しかもその期待に必要な忍耐を十分持つてゐる男のやうであつた。幅の廣い肩を椅子の後にもたせかけて、棧敷一ぱいに足を踏ん張つて、靜かにあちこちを見廻してゐた。アランの體格は大きいといふ方ではなかつたが、丁度拳闘家のやうながつしりした骨組を持つてゐる。頭の周圍は大きく、細長いといふより四角だ、やゝ粗野な感じのする無髯の顔の色は、特に暗鬱であつた。この冬の最中ですら、頬にはそばすの痕を見せて、世間並みに綺麗に分けた頭の髪は、栗色で軟らかく、電燈の反射で銅色に光つてゐた。兩方の眼は、しつかりした額の下に溝のやうに窪み、明るく暗碧色の光を湛へて、いかにも人の好きさうな子供らしい表情であつた。全體から受ける印象は、たつた今航海から戻つて來たばかりの船のオフィサアと云つたやうなところで、新鮮な空氣を腹一杯吸ひ込んでゐるが、今日は思ひがけなく燕尾服を着込んで、それがどうも體に付かないといふ格好である。どう見ても、一個の健康な、少し粗笨ではあるが、人の好きさうな人間だ。智的教養も無いといふのではないが、何れにしても大したものではない。

アランは出来るだけ退屈しないやうにした。この男に對

して何の魅力も持たない音楽は、考へを纏め深めるかはりに、放散させ逃げてゆかせた。アランはこの廣大な廣間の容積を目測して、天井と、周囲を取り巻く棧敷の構造とに驚嘆した。それから平土間にきらくと震へ動く扇の海を見渡して、兎に角この國にはうんと金があるのだから、此處で今自分の考へてゐるやうな事が、計畫されない筈はないと考へた。又ごく實際的な事ばかりしか考へない男であつたから、この音楽堂で一時間の照明に要する費用を勘定し初めたものである。それは完全に一千弗は費る勘定であつた。それから續いて、一人々々の男達の研究に移つてみた。もともと女性に對してはまるで興味をもたない男で、やがてもう一度、ロイドの誰もゐない棧敷へ眼をやつてから、オオケストラの方を見下した。アランの席からはその右側が見渡せた。これで音楽にまるで理解のない連中と同じやうに、この男を啞然たらしめたものは、オオケストラを動かしてゐる機械的正確だつた。アランは少し半身を乗り出して、指揮者を眺めようとしたが、指揮棒を振つてゐる手と、その腕とが時々オオケストラ・ボックスの縁を越して見えたに過ぎない。この瘦せこけた弱々しい有名な指揮者に對して、一晚六千弗の金を支拂ふといふ事は、アラン

にはまるで不可解な謎であつた。アランは、その男をちつと注目した。外見からして尋常外れの男である。釣鼻に、小さい生々とした眼、固く結んだ唇、それから薄くなつた髪が後の方へ逆立つてゐる様子は、禿鷹を思ひ出させた。まるで骨と皮ばかりで神經以外には何も無いやうに見えるが、音と騒音との混沌たる眞中に平然と突立つて、思ふがまゝに、棒の上一下で處理して行く、その白い、見たところ力も無さうな手。アランは魔法使を目前に見たやうに驚嘆した。尤もその魅力と祕密の中へ踏入つて見ようといふやうな心持はなかつた。アランにはこの男が、遠い大昔の特殊な、不可解な、もう滅亡に近付いてゐる異人種としか思はれなかつた。

丁度この瞬間である。瘦せこけた指揮者は不意に、兩手を高く差し上げて、狂氣のやうに振り廻した。その兩手には忽然として、超人の力を宿したやうに見えた。オオケストラは爆發し、ばつと燃え上つたと思ふと、一舉に靜まつた。

拍手と喝采の聲は雪崩の如くに場内に湧き返り、壯大な建物も揺かんばかりに轟き渡つた。アランはほつと息をつきながら身繕ひをして、起ち上らうとした。けれども、そ

れは思ひ違ひで、下では、その時既に木管楽器が緩徐調を初めてゐた。隣り機敷の方からは、こんな會話の終りも傳はつて來た……「二割の配當さ。どうだね。——とても素敵な仕事ぢやないか、まるでこれは……」

アランは仕方なく復た腰を降ろしたが、もう一度周圍の機敷の構造を研究し初めたものである。この構造は、アランにはよくのみ込めなかつた。ところでアランの細君の方は、まだほんの初歩ながらピアノストであつたので、身も魂もこの音楽に打ち込んでゐた。夫と並べて見ると、モオドはいかにも華奢で小造りである。美しい栗色の髪の毛の聖母型の頭を、眞白な手袋をはめた手で支へながら、透き徹るやうな綺麗な耳は、上下と云はず左右と云はず、八方から流れて來る高低さまざまの音律の波を吸ひ込んでゐた。二百餘りの楽器が空氣に傳へる無數の振動は、モオドの全身のあらゆる神經を揺り動かさずにはゐなかつた。その眼は大きく開いて、瞬きもせずに遠い空間を見詰めてゐた。この若い細君が受けた感激は極めて強くて、軟かい、滑かな兩の頬は、圓く赤く染まつてゐた。

モオドはこれほど深い感動をもつて音楽を聴いた事はなかつた。第一これまで一度も、かういふ素晴らしい音楽を

聴いた事が無かつたのである。ほんの短いメロディや、つまらぬモチーフでさへ、モオドの魂へ今まで夢にも知らなかつた、或る輝きを喚起した。一つ／＼の音調でさへ、生れてから初めての、匿された歡喜の脈管を燃え立たせ、それがばつと流れ出て、心の底から魅惑し盡す勢であつた。この音楽がモオドの心に滲み込ませたあらゆる感情は、最も純粹な喜びと美しさであつた。音楽が見せてくれるすべての幻影は、モオドの心には、尊い光明の中に浮び出て、いかなる現實よりも美しいものであつた。

モオドの生活はその姿の通りに、有りの儘で單純であつた。これと云つて大きな事件も無ければ、別段に問題となる程の事も無く、世間有り觸れた若い娘や人妻と同じやうな生活をしてゐるのである。生れた土地はブルックリンで、父はそこに印刷工場を持つてゐた。それから、バアクシャイ・ヒルの別荘に連れて行かれ、其處で生粹の獨逸人である母親の膝下に甘やかされて育つたのである。學校教育も立派に済まして、二夏續けて、ショウトウクの夏期大學で講義も聴いたし、小さな頭にうんと學問と知識とを詰め込まされたが、之は直きにまた忘れてしまつた。別に普通以上の音楽的才能があつた譯でもないが、ピアノは立派に仕上げ

て、ミュンヘンや巴里での稽古は一流の教師に就いたものである。それから母親と一緒に方々を漫遊した。その頃にはもう父親は死んでしまつてゐた。又スボオトをやつて、若い男達と他愛ない噂を作つた事も、若い娘に有り勝の例に洩れない。かうして青春の樂みは十分堪能したのだが、今はもうそんな事なぞまるで忘れてゐる。それからモオドは建築技師ホッピイの戀を斥けて、現在の夫である技師マック・アランと結婚したのである。その理由は、ホッピイを愛したのは、たゞ一個の友達としてに過ぎなかつたが、アランを愛したのは、何となく蟲が好いたからである。この結婚式がまだ擧げられない先に、大事にしてゐた小柄の母親が死んで、モオドは悲嘆の涙に暮れた。それから子供が生れたのは、結婚後二年目で、女の子であつた。モオドはこの子を何よりも可愛がつた。モオドの今日迄の生活はこれだけである。今は二十三で、幸福な生活を送つてゐるに過ぎない。

モオドが今うつとりした好い心持になつて、この演奏に聴き惚れてゐたその間に、胸の中に咲き開いて來たものは、豊富な色々の思ひ出であつた。取り止めもなく勝手氣儘に消えたり現はれたりする思ひ出ではあるが、不思議に總て

が明瞭に、著しく暗示的であつた。同時に自分の生活が、急に神祕的な、深い、豊富なものに思はれ出したのである。眼前に現はれて來た小柄な母の姿は、無限の崇高さと善良さを持つてゐた。けれども、さう考へても何の悲哀も伴はずに感じられるものは、たゞ云ひ現はし得ない情愛と悦びだけであつた。まるで、母親がまだこの世に生きてゐるやうな心持である。それと一緒に、今度はバアクシャイア・ヒルの景色が浮んで來た。少女の頃によく自轉車で横切つた處だが、今思ひ出の中に甦へつて來た風景は、神祕に満ちた美しさと不思議な光に包まれてゐる。モオドはホッピイの事を思ひ浮べた。すると同時に、自分の少女時代の部屋の有様が、眼の前に現はれて來た。様々な書物が一杯に並んでゐる部屋だ。やがてピアノに向つて稽古してゐる自分の姿が見えて來た。けれどもさうすると直ぐその後から、再びホッピイの顔が浮んでくる。それはテニススコートの片端のベンチに、自分と並んで腰かけてゐるホッピイである。もう大分薄暗くなつてゐて、コオトに引かれた白いラインだけがやつと見分けられる頃だ。ホッピイは脚を組んで、ラケットで白い靴の尖端をこつ／＼と叩きながら、何か喋つてゐる。この時の自分の姿が、モオドにはあり／＼と思ひ